
初バッテリー！

吉善

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初バッテリー！

【Zコード】

Z0275P

【作者名】

吉善

【あらすじ】

県大会決勝九回裏。

一点をリードしていたうちの高校は、エースピッチャー・笹垣先輩の剛速球に早くも勝利マーク。

だが、突然キャッチャーが倒れ、タンカで運ばれてしまった。残る控えのキャッチャーは俺一人。

元々俺とバッテリーを組んでいたピッチャーは戦意喪失。

会議の末監督の出した決断は、俺と笹垣先輩による初バッテリーの結成だった……。

(前書き)

お久しぶりです。
吉善よしよしです。

僕の二作品目は「初バッテリー！」です。

まさか、野球をやつた事のない僕が野球のスポコン作品を書くことになるとは……。

人生、何があるか分りません。

(というか、スポコンと呼べるのか微妙ですが)

……さて二作品目「初バッテリー！」。

最後までお楽しみください。

俺は森和樹。

埼玉の高校で野球のキャッチャーをやつている一年生だ。
中学から一緒に木山とバッテリーを組んでいる。

うちの高校はピッチャーが少ないため、予備のキャッチャーとして、木山と共にベンチ入りしている。

だが、そんなうちの高校を思わぬアクシデントが襲つた。

県大会決勝9回裏、1アウトランナー無し。

2点リードを奪つたうちの高校は、早くも勝利ムードを迎えていた。

だが、8番バッターを二球三振に押さえツーアウトとなつた時、キャッチャーに異変が起こつた。

突然グローブの上から左手を押され、前に倒れ込んだのだ。

立ち上がれないほどの激痛でうずくまるキャッチャーは、担架で運ばれていった。

応援団達がざわめく中、俺たちの方のベンチでは緊急の会議が行われた。

9回表、キャッチャーが打席に立つた時に、内角に入った球が左手の甲を直撃するデッドボールが原因だった。

当たつた直後は平氣だと言つていたのだが、やせ我慢だったようだ。

監督の話によると、今は安静にしていれば大丈夫なようだが、この試合はもう球を捕れないのだそうだ。

そんな中俺は、一人木山を説得していた。

「木山！あと1アウト、もう相手の9番を押さえるだけなんだ！」

「む、無理だよ……！」

木山は怯えていた。

それもそうだ。

相手は強力打線で有名な高校だ。

ここまで先輩達が無失点で押さえてくれたのは、もはや奇跡とか言いようがない。

その奇跡を自分が無駄にするかもしれないというプレッシャーが、木山を押しつぶしたようだ。

……とは言つたものの、バッテリーは相性があるため、基本的に一人セツトで出ることとなつていて。

すでに降板した先輩達を除くと、出れるキャッチャーは俺だけだということになる。

だが、肝心のピッチャー木山がこれでは、試合にはならない。

「どうしましょっ監督。木山が出たがりませんし、もし出たとしても、あんなにプレッシャーがかかつた状態ではろくな投球が出来ません」

「仕方ない。今回は特別に、笹垣と森をバッテリーとする」

この監督の一言により、俺と先輩の初バッテリーが結成されたのであった。

「森…だつたな。よろしく

「よろしくおねがいします！」

ピッチャーである先輩の名は笹垣桂助。

2年にして高校トップレベルの150キロストレートを武器に、数々の高校球児から三振を奪つた期待のエース。

名のある名門大学やプロのスカウトマンも目を光らせている。

だが、俺はまだその剛速球の捕れない。

先輩と話し合つた結果、変化球を投球の主軸にすることとなつた。だが……。

「変化球は……。あんまり期待するなよ

「え……。あ……、はい」

この時、このバッテリーが試合の流れを大きく変化させる事を、俺も笠垣先輩も、まだ知る由もなかつた。

俺はキャッチャーメットをかぶり、バッター・ボックスへ向かつた。正式な試合でグラウンドに入るのは初めてだつた。

「プレイ！」

審判の試合再開の合図で、俺の心拍数は頂点に達した。緊張で笠垣先輩がぶれて見える。

俺は冷静になろうと、先輩との打ち合わせを思い出した。

「9番は右バッター、外角へのカーブが苦手だそうだ。そこを攻めるぞ」

笠垣先輩からの指示は、打ち合わせ通りの「カーブ」だ。球が来る所に、前もってミットを構える。

大きく振りかぶり、球を投げる。

先輩の投げた白球が右にカーブし、吸い込まれるように俺のミットに向かつて飛んでくる。

だが、あと1メートルといつた所で球の位置に違和感を感じた。

「まさか……」

球は捕れた。

だが、審判の判定に俺は違和感の正体を確信した。

「ボール！」

今の球は、確かに外角を狙う球だった。

だが、外さないように確實にストライクを取るつもりだつた。だが外れた。

先輩は変化球に期待しないようにと言つていた。
本当だつた。

変化球が出来ないわけではない。

だが、先輩は変化球の加減が苦手だったのだ。

次の球の指示は、またもやカーブ。

だが、今度は外角高めだ。

先輩が球を投げる。

だが、今回の球も指示通りの球ではなかつた。

おそらく先ほどどの球がカーブしそうなため、それを緩めたのであらう。

確かに高めではあるが、ほとんどカーブがかかつておらず、スピードの遅い直球のような球となつていた。

バッターが振った。

バットが球の下半分をかする。

俺と審判の頭上を越え、真後ろのフォンスに直撃し、地面に落ちる。

「ファール！」

審判が投げたボールが先輩へ向かって伸びていく。

ボールを取つた瞬間、先輩と目が合つた。

にらみつけるような、覚悟を決めた目だった。

先輩からの指示は「真ん中へのストレート」。

俺はとっさに、タイムをかけ、先輩の元へとかけよつた。

「150キロなんて俺取れませんよ！」

「……ミットを真つ直ぐ構えてろ。そこに俺が球をぶち込む。変化球は無理だが、直球のコントロールは自信がある」

「せ、先輩……。打たせて捕る戦法は……」

「出来ん。それに、相手は1番から4番まで上位打線で固めている。この9番を三振に押さないと、もうアウトを取るチャンスは無いぞ」

先輩振りかぶる。

この球が、何人もの高校球児達から三振を奪つてきたストレート。

始めてみた剛速球、リトルリーグ時代から球を捕つてきた。

だが、この球はもはや、別世界の球のようだつた。

キャッチャーの俺が見ても目には止まらない速さ。

俺は思わず、目をつむってしまった。

バットのスイングの音がした瞬間、ミットの中に球が直撃する。手首から持つて行かれそうなほど衝撃が走った。

一瞬、手からミットが外れそうになった。

左手の握力でそれを防ぐ。

ミットは、俺の左手から半分だけ抜けて止まった。

左手が麻痺している。

150キロの、先輩のストレートが捕れた。

そう思った瞬間だつた。

突然、バッターがバットを放り投げ、一塁へと走り出した。

その時、俺は意味が分からなかつた。

なんでコイツは走っているんだ……！？

このバッター、確かにバットは振つた。

だけど、バットに当たつた音なんかしなかつた。

ボールは俺が捕つたんだ、俺が捕つたんだ！

今、ボールはミットの中にある、ハズなんだ……！

球を捕つた衝撃で残つた麻痺が、少しづつ引いていく。

左手自体の感触、その左手に半分だけはまつたミットの感触が戻つてくる。

だが、ミットの中にある、ボールの感触だけが、そこには無かつた。

「ボール捕れ森！！」

俺はハツとした。

先輩が指さした先、右の後ろからボールが地面に落ちた音がした。やつと俺は分かつた。

俺は、150キロの球なんか、捕れなかつたのだ。

振り逃げだ。

慌ててボールを取りに行く。

何度も弾むボールを空中で捕り、一塁へ送球する。

だが、俺の肩では、ランナーを刺すことは出来なかつた。

ツーアウト1塁、次のバッターは1番。

「」からは、相手チームの上位打線にぶつかるのであつた。

それからといふものの、俺と篠垣先輩のバッテリーは「ぐー」とく
打たれ続けた。

一番はレフト前ヒット。

2番は右遊間を抜ける強打により、ついには満塁となつた。

続いては3番バッター。

しかもこのバッター、今大会からずつと調子がよく、この試合で
も篠垣先輩から3打席2安打を記録している。

外角高めのストレート。

ほとんどを変化球で攻めてきた今までの戦法。

おそらく先輩は、相手もその戦法を読んで対応し始めてきたため、
その裏をかくつもりだ。

これにより相手側のバッターが混乱すれば、いつか相手バッター
の穴が探れるはず。

そんなことを予測しながら、俺は外角高めにミジットを構えた。
先輩が投げる。

サイン通りのコースにストレートが来る。

さすがは先輩のストレート。

変化球は苦手だとしても、ストレートのコントロールはやはり一
級品だ。

バッターはこの球を見逃した。

「ストライク！」

審判の判定に、バッターは驚いた表情をした。

おそらく外角への球をカーブだと思い込み、ストライクゾーンか
ら外れると思ったのだろう。

だがストレートは外角ギリギリのストライクだ。

スピードを加減した、俺でも捕れる135キロのストレート。

これで、流れを変えることが出来る。

俺はそう思った。

2球目。

今度は内角低めのシューート。

バッターから見て右に曲がるカーブに対し、左へ曲がるシューート。今までほとんど投げずに印象が薄くなつたため、意表を突いたようだ。

ストライクゾーンを外したたまに、バッターはバットを振った。

2ストライク。

後一球ストライクを取れば試合終了。

だが、勝利を予感した俺の考えは、すぐに甘かつたことに、嫌が応でも気付かされる事となつた。

3球目。

内角から外れる高めのシューート。

ボール球に手を出すかと思つたが、先ほど見せたせいでシューートにも警戒し始めたようだ。

4球目。

この時、先輩の配球は完全に読まれてしまつていた。

相手が予想しないコースを攻めようとしがたため、外角高め、内角低め、内角高めと四隅を3つ連続で投げた次のコース、外角低めだと読まるのは当たり前のことだった。

バッターのスイングは見事に外角低めを居抜いた。

先輩の頭部横30センチというピッチヤー返しギリギリの弾道。セカンドのダイビングキャッチも間に合わず、センター前ヒット。3塁ランナーがホームベースに戻つてくる。

バックホームを諦めたセンターが2塁へ向かう走者を刺さつする。

ここを押さえれば3アウトにより試合終了だ。

だが、相手のランナーも必死だった。

決死のヘッドスライディング。

センターからの送球はタッチの差で間に合わず、セーフとなつてしまつた。

そして、ランナーがホームベースを踏んだ。

相手側のベンチが沸いた。

最悪の展開だ。

ツーアウトランナーなしの状況から、俺の捕球ミスと連打で満塁。そして3番バッターのヒットにより1点返され一点差。ここで逆転されればサヨナラとなるこの状況で、次のバッターは

4番。

完全に向かい風となつた試合の流れ。

プレッシャーがのしかかり、目が眩んできた。

手足から血の気が引き、手で触つてもいなのに、心臓の動きが全て分かる。

「しゃきっとしろ！森！！」

笠垣先輩からのゲキが飛ぶ。

そうだ。

まだ試合は終わっていないんだ。

相手チームの4番バッターが打席に着いた。

一球目はド真ん中から左に外れるショート。

二球目は全力でカーブをかけ、内角へのコースから外角へ外れるカーブ。

だが、どちらもバットを振らせることは出来なかつた。

先輩がタイムをかけた。

「おい森、この4番の選球眼はそつどいなものだ。もう俺の変化球は一切効かん」

「え、それじゃあ……」

「だからお前に道を選ばせてやる」

「え……」

「一つは、俺に降板させて、お前のいつものバッテリーでこの怪物に勝負を挑む道。……んで、もう一つは……」

俺は先輩の見た。

「俺のストレートを捕る」とだ

「プレイ！」

マウンドに立ったのは……。

笹垣先輩だ。

逃げたくなかつた。

それに、俺だって高校球児だ。

たとえ百分の一でも、千分の一でもいいから、可能性に賭けたかつたのだ。

「ビデーるなよ森！！」

「はーっ！」

さつきは無理矢理捕るはめになつた。

だけど、今回は違つ。

俺が決めたんだ。

俺が、先輩のストレートを捕つて決めたんだ。

捕つてやる、150キロだろうと、160キロだろうと、200

キロだろうと捕つてやるー

先輩が大きく振りかぶつた。

150キロの剛速球。

今度は絶対に目をつむらない。

真っ直ぐに構えた俺のミットに向かって、ストレートが伸びる。バッターがバットを振った。

バットの軌道は、ちょうど球の通るコース。

そして……。

まるで、雷でも落ちたかのような轟音が響いた。

だが、それはバットがボールに当たった音ではなかつた。

「ストライク！！」

俺は我が目を疑つた。

左手のミットにボールがある。

俺は、先輩のストレートを捕つたのだ。

再び沸き上がる歓声。

「あと一人！あと一人！！」

この一球が、試合の流れを変えた。

俺は、そんな気がした。

だが、その喜びも、つかの間のことだつた。

三振まであと一球。

再び先輩のストレートが俺のミットめがけて投げ込まれる。

バッターがバットを振る。

先ほど空振りさせた時と同じに見えた。

だが、ほんのわずかだけだが、先ほどよりも振り始めるのが早かつた。

金属バットの真芯がボールを捉えたとき特有の高い音が球場内に響いた。

あの4番バッターが、先輩のストレートを打つたのだ。

「打つた！」

相手チームの面々が声を揃えてそう言つているのが聞こえた。

打つた……？

先輩のストレートを、あのストレートを……！？

俺がストレートを取れるかどうかの問題以前に、先輩のストレートが打たれる。

そんな事、俺は予想していなかつた。

一墨とライトの頭上を遙かに越え、ライト側のポールに向かつて打球が伸びていく。

あのポールに当たれば、サヨナラホームラン。

即、試合終了だ。

だがその時、ほんの僅かに風が吹いた。

レフトからライトへ吹く風だ。

「外れるーーー！」

笠垣先輩が雄叫びのような叫び声をあげた。

もはや、僅かな風と神頼みだけが頼りだつた。

俺も声を上げた。

「外れる、外れるーーー！」

ボールに打球が当たると、角度にもよるが、その反動でボールの軌道が大きく変わり、場合によつてはマウンドに跳ね返つて来ることがある。

だが、ボールの軌道は変わらず、打球はそのまま、スタンンドに突き刺さつた。

ファールだ。

先輩がタイムをかけた。

「せ、先輩……」

「喋るな。とりあえず、プラス思考しろ

「へ……？」

「まずは……、そうだな。今のファールで、球を捕らなきゃならぬい回数が一球減つた」

確かに、今のファールでストライクのカウントが2になつたのは

助かった。

先輩のストレートを、次も捕れる保証は無いからだ。

「あと、良い風が吹いた。俺達には野球の神が降りてきたのかもな」「はあ……」

「そんで、あいつは2球目のストレートで勝負に出た。一球見逃せば球がそれなりなんかしなかったのによ。詰めが甘い」

「そうなんですか？」

「ああ。あの4番、序盤は空振つてぱっかだったが、あれは球の軌道を測るためにだつたんだな。まあ、それに集中しすぎたせいでのタイミングは今から掴むしかなかつたようだが……」

「へ……？先輩、あのバッター振るタイミング完璧だつたと思いますけど……」

「俺の言つてる意味分かんねえのか？しあうがねえな……。かいつまんで言つと、ストレートは打つタイミングによつて球の飛ぶ方向が変わるんだよ。右打ちの場合、早いタイミングで打つとレフト、遅いタイミングで打つとライトだ。左打ちはその逆。おそらくあのバッター、タイミングの修正が微妙に甘かつたんだな」

「そ、そだつたんですか？」

「ああ、だが、今のファールの時の球でタイミング完全に覚えただろうな。次打つたら間違いなくホームランだ……。あのバッターがタイミング掴んじましたのが厄介だな」

「あ、そうだ！スローボールでタイミングをずらせば……」

「出来ん。俺は昔から、スローボールを投げるとミットにたどり着く前に落ちるんだ」

「ええ！？じゃあ、もう打つ手ないんじや……」

「……いや、スローボールは出来んが、他の方法ならある

「本當ですか！どんな弱点ですか！？」

「それは……まあ、今は気にすんな。とにかく、これからもストレート一本だ。ビビるな。何があつても口を開じるな。瞬き一回でもしたら私刑（リンクチ）だ！」

「そんなん……！？」せめてヒントぐらい

「じゃあさつきあのバッターが空振つた原因を考えろ。それに……」

先輩は俺の背中を叩いた。

「野球の神が降りた奴はなんでも出来るよ！」なるんだぞ。お前だつて、150キロ捕れただろうが」

そこまで言つて、先輩はマウンドに戻つていった。

試合が再開され、先輩が振りかぶる。
なぜだかは分からぬが、先輩の振りかぶり方に、何か違和感を感じた。

あの時俺が捕れなかつたストレートは違つ。
もしかしたら、この4番バッターの弱点を突く球かもしれない。
俺はそう思つた。

だが、俺の予想はすぐに崩された。
「うおおおおおおおおおお！」

先輩は、投げながら雄叫びを上げていた。
振りかぶる時の違和感は、この雄叫びの前兆だつたのだ。

先輩のストレートは異様だつた。

確かに150キロのストレートも異様だが、それを越える異様さ

だつた。

ミットがめり込むような感触だ。

「ストライク！バッターアウト－ゲームセット－！」

俺は、やつと分かつた。

最初あのバッターが空振つた原因は「タイミングのずれ」だ。

変化球は選球眼で封じられ、バットのスイングとのタイミングを外すしかない。

球の速度を落とせないなら、球の速度を上げればいい。

そう、150キロを超える、剛速球が必要なのだ。

これは後に聞いた話なのだが、この時の先輩の球は155キロに達していたという。

試合が終了し、俺は先輩の元へ駆け寄った。

「スゴいです先輩！今までより速い球でしたね！」

「お前が限界超えたんだからな。先輩の俺も限界超えんと面子が立たないからな」

「あれ……？でも俺、150キロ捕つた後にさらに速い球を捕つたって事は、一回も限界超えたって事になりません？」

「あ……」

こうして、俺と笹垣先輩との初バッテリーは、見事に相手の攻撃を押さえ、勝利をもぎ取ったのであった。

おわり

(後書き)

改めまして吉善よしよしです。

良く読み間違えられますが「あひぜん」でも「よしき」でもあります。

「あひよし」です。

……さて三作品目「初バッテリー！」。

いかがでしたでしょうか？

見てくださった方からの感想をいただければ非常に励みになりますので、宜しければお願ひします。

最後までご覧いただき誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0275p/>

初バッテリー！

2011年1月21日16時55分発行